

『万国博覧会と人間の歴史』（佐野真由子編、思文閣出版、2015年）より

目次

はじめに——本書について .....	佐野真由子	3
<b>I 博覧会の人</b>		
万博の人、ラザフォード・オールコック .....	佐野真由子	21
——一八五一、一八六二、一八七八、一八八六		
岩倉使節団の見たウィーンとウィーン万博 .....	芳賀 徹	53
一八七八年パリ万国博覧会における前田正名の役割 .....	寺本敬子	73
——ジャポニスム流行の立役者		
「隠者の国」朝鮮士大夫のアメリカ文明見聞録 .....	ユク・ヨンス	103
——出品事務大員鄭敬源と一八九三年シカゴ・コロンビア万国博覧会		
並河靖之と万国博覧会——並河七宝と巴里庭をめぐる人びと .....	武藤夕佳里	135
建築家劉既漂と中国における「新建築」の誕生 .....	青木信夫	177
——パリ万博から西湖博覧会へ		
万国博覧会と藤田嗣治 .....	林 洋子	211
——一九〇〇年パリ、一九三七年パリ、そして一九四〇年東京		
<b>II 博覧会の場所</b>		
景福宮から朝鮮博覧会場への空間変貌 .....	ウィーベ・カウテルト	235
幻の博覧都市計画——東京月島・日本万国博覧会 .....	増山一成	267
中空構造で解く千里ニュータウンと大阪万博 .....	中牧弘允	297
南紀熊野体験博と熊野の表象 .....	神田孝治	321

### Ⅲ 博覧会と仕事・社会

資料から見るランカイ屋と装飾業の歴史……………	石川敦子	351
コンパニオンが女看守とよばれたころ…………… ——博覧会場における女性接遇員の成立と展開	井上章一	385
博覧と衆智——渡辺洪基と萬年会の目指したもの……………	瀧井一博	407
万国博覧会を飾った日本の革と紙——ジャポニズムを越えて……………	鵜飼敦子	427
都市の電化と博覧会……………	橋爪紳也	443
愛知万博前夜——博覧会の企画制作現場から……………	澤田裕二	475
上海万博・麗水万博日本館から見た日本の博覧会行政……………	岩田 泰	505

### Ⅳ 博覧会の形成と展開

近代パリ万国博覧会の軌跡 一八五五～一九〇〇…………… ——その〈万有理念〉が顕すもの	市川文彦	533
万国博覧会とオスマン帝国…………… ——「美術」とオスマン宮廷の日本趣味受容	ジラルデッリ青木美由紀	561
オリエンタリズムとナショナリズム…………… ——中国の万国博覧会参加をめぐる権力の変容	徐 蘇斌	591
南洋勸業会をめぐる日中関係——上海万博との対比から……………	武藤秀太郎	621
戦後日本が夢見た世界——万国博覧会美術展、原始美術、太陽の塔……………	川口幸也	647
都市化をテーマとした上海万博…………… ——万博をめぐる中国の過去と未来	江原規由	681
中国における博覧会ブームの誕生……………	曹 建南	711

おわりに 729

研究会の記録 733

執筆者紹介 i

## はじめに——本書について

佐野真由子

日本の社会に一時代を画し、いまでも多くの人々が共有する経験と思い出をもたらした一九七〇年大阪万博は、日本における本格的な万国博覧会研究の契機ともなった。開幕に先立つ一九六〇年代から、現在進行形の大事業であった大阪万博そのものに関する論評類もさかんに刊行されるようになったが、ここでいうのは、一八五一年のロンドン博を初回として連綿と続いてきた、歴史上の万国博覧会に着目した研究のことである。大阪万博は、世界の物産を広大な会場に集め一望のもとに展示した万国博なるものがイギリスで誕生し、一八五三年ニューヨーク博、一八五五年パリ博と引き継がれ、以降一世紀以上にわたり欧米諸国で開催されたのちに、初めてこれを、アジアないし非西洋の一国が実現したのであった。当時、その歴史に関心が向けられたのは当然ともいえる。

最初のもまとった研究の試みは、京都大学人文科学研究所を中心に、多分野から集合した研究者グループによって着手された。「学際的」という形容にふさわしいその顔ぶれは、万博という巨大複合事業の性格をそのまま語っている。同時に、そうした学際的共同研究を可能にする京大人文研という先駆的組織の存在あってこそ、万博などという膨大な対象をとりあげることができたといえるだろう。その成果である吉田光邦編『図説万国博覧会史 一八五一——一九四二』『万国博覧会の研究』（それぞれ一九八五年、一九八六年、ともに思文閣出版）は、万博の研究に携わる者にとっていまでも基本文献の位置を占める。筆者自身、学部学生時代に初めて、万博という限りない魅力に溢れた研究対象と出会ったときも、時を経て自分がゼミ学生を持つようになったときも、両書のお世話になってきた。

これらの次世代版としての、二一世紀の万博論集を——。冒頭から思い切った自負を述べる事が許されるなら、これが、本書をつくるにあたって私たちがめざしたことである。本書の母体である国際日本文化研究センター（日文研）の共同研究会「万国博覧会と人間の歴史——アジアを中心に」は、右の京大グループで最も若いメンバーであった井上章一（現日文研教授）、橋爪紳也（現大阪府立大学特別教授）両氏を擁し、その万博研究に導かれてきた世代の筆者が研究代表を務め、さらに多くの新たな顔ぶれを迎えて、ともに議論を重ねてきた。その成果としての本書を、三〇年前の書と同じ思文閣出版から刊行できることは、大きな喜びである。

吉田光邦氏らの成果以降、日本の万博研究には多大な蓄積がある。たとえば国立国会図書館の雑誌記事索引で、「万国博」「万博」などの語を用いて検索すれば、ほとんど数え切れないほどの数の論文がヒットする。注目を集めた単著も少なくない。大阪万博をきっかけにこのテーマが「発見」されて以降、万博は、その全体計画や会場設計から、個々の展示物、また開催をめぐる政治や外交の問題等々まで、さまざまな視角を持った研究者に、無限の考察材料を提供

してきたといってよい。

ただ、そこに見られる顕著な傾向の一つは、欧米諸国で開かれる万国博覧会において、日本がどのように自己の展示を構成し、それが受け取られてきたかという、日本をめぐる文化表象の問題が関心の中心になってきたということである。統計的に調査したものでこそないが、ここに、万博を考える際の、いわば視線の偏重があったことは間違いない。結果として、日本の万博研究は、西洋との関係において「異文化」ないし「他者」としての日本文化がどう扱われてきたかに注目し、ひいてはその背後にある西洋世界の近代化と帝国主義的拡張を批判的に論じるという方向がかなり強いものとなっている。

このことは、日本がその近代化の過程で国際社会との関係を深め、またそこでの自己の位置を確立するうえで、万国博覧会という窓がいかに重要な役割を果たしたか、現に明治政府の重鎮らが万博参加という事業にどれほど重大な意識を払い、諸国へ好印象を与えるべく努力を重ねたかを考えれば、歴史上の関心としては自然であって、それ自体は批判するにあたらぬ。かくいう筆者自身も、学部学生時代にそのような観点から万博に興味を持ち、「文化の実像と虚像——万国博覧会に見る日本紹介の歴史」というタイトルで卒業論文を書き、初めて活字になった著作もその改訂版であった。現在も関心の軸は変化していない。

にもかかわらず、筆者がみずからこの「視線の偏重」に疑問を持つようになったのは、自身の研究ととくに関係の深い一八六二年の第二回ロンドン万博について、日本にかかわる部分だけでなく、その開催経緯の全体を調査したことがきっかけであった。同博は、後掲の拙論でも少し触れるように、当時の駐日英国公使ラザフォード・オールコックの助力によって幕末の日本が初めて参加した万国博覧会であり、いわゆる日本文化の表象というテーマの原点としてもむろん重要である。しかし、だからこそこの万博の全容を知りたいという純粋な動機から、二〇〇七年前後の時期、渡英の機会を見つけては、イギリスの万博関係史料の公式寄託先となっているナショナル・アート・ライブラリー——一八五一年第一回ロンドン博の遺産であるヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（当初の名称はサウス・ケンジントン博物館）の一部局となっている——に籠もった。当時の万博主催者が残した実務資料のファイルを端から紐解くうち、日本の既存研究の多くが日本の万博参加における特徴であるかのように捉えてきた、「異文化」としての日本文化の取り扱いやそれをめぐる政治上の諸問題が、他の非西洋諸国の歴史的な経験と多分に共通しており、あくまでその一例でしかないことに気づいた。

このことは、いったん気づけば当たり前のことのようにありながら、当時、筆者に大きな衝撃を与えた。文化の問題を論じる以前に、日本が万博に参加するようになった経緯自体、日本側から眺めていればむろん特筆すべき大事件だが、主催国の実務上は、多数の国々を相手に、大概は一斉に片づけられる事務処理の一環でしかない。拍子抜けするほど淡々としたものであった。

そうした主催国側からの視点、そして、日本と経験を共有する他の非西洋諸国の視点を取り込みながら考察しなければ、国際社会における日本の位置を把握し損ねることになる——「日本文化の表象」という問題に強い関心を持ち、日本を中心に据えて考えてきた自身の視角を、世界史のなかで思い切って相対化しなければならない。こうした思いは、筆者にとって万博研究にとどまらずもっと広範な意味を持つようになり、その後の研究スタンスや、おそらく物の見方全般にも大きな影響を受けた。

しかしこのことは、自身の研究対象として日本の事例を掘り下げるのをやめるという意味ではない。逆に、一人で世界中のことを調べ、比較するなどというのはそもそも不可能である。ではどうしたらよいのかと悩むうち、そのような世界史的な広がりを持つ万博研究を個人で進めることはできないが、互いに比較可能な視点を持つ研究者が共同で試みることはできるのではないかと、という考えが生まれた。中国や韓国といった近隣諸国での研究状況についても聞いてみると、万博研究自体の蓄積は日本ほど厚くはないものの、自国の文化の扱われ方に研究が集中する傾向は似ていることがわかり、連携しての研究の必要性に賛同してくださる方々も現れはじめた。初めから世界大の構想で着手するというよりは、まずは近隣アジア諸国との比較を中心に、従来の枠組みを脱した万国博覧会研究のあり方を検討してみようと考えようになり、そのころちょうど日文研に移籍したこともあって、まずはごく小さな試みから、こうしたアイデアを実行に移す機会に恵まれた。ここまでの研究会の展開を左に記しておきたい。

①二〇一〇年一〇月八日～一一日（於・上海）

研究会「万国博覧会と東アジア——共同研究の可能性を探る」（日文研の稲賀繁美教授を研究代表とする科学研究費補助プロジェクト基盤研究A「「東洋」的価値観の許容臨界——「異質」な思想・藝術造形の国際的受容と拒絶」〔二〇一〇～二〇一二年度〕の分科会として）

②二〇一一年二月二五～二六日（於・京都）

日文研所長裁量経費による研究会「万国博覧会と東アジア——共同研究の可能性を探る（第二回）」

③二〇一一年九月三日～一〇月一日（於・京都）

日文研シンポジウム「万国博覧会とアジア——上海から上海へ、そしてその先へ」

④二〇一二年四月～二〇一三年三月（研究会計三回、於・京都）

日文研共同研究会「万国博覧会とアジア」

⑤二〇一三年四月～二〇一六年三月（研究会計一五回、於・京都、大阪、愛知、沖縄）

日文研共同研究会「万国博覧会と人間の歴史——アジアを中心に」

※このうち二〇一四年一〇月の研究会は、日本万国博覧会記念基金の助成を受け、国際ワークショップ「万国博覧会の歴史と未来」として海外ゲストを交えて行うことができた。本書執筆陣のうち、ユク・ヨンス、ジラルデッリ青木美由紀、曹建南の三氏はその際のゲストである。この場を借りて、同基金を運営される公益財団法人 関西・大阪世紀協会にあらためて御礼申し上げるとともに、ワークショップ参加後、このような形で研究会にかかわり続けてくださった三氏に感謝したい。

①②は本当に小さな集まりだった。このときから本書刊行にいたるまで一緒に活動してくださっている、徐蘇斌氏（天津大学）、青木信夫氏（同）、鶴飼敦子氏（東京大学）には、いくら感謝しても足りない。また、①の上海行きを通じて、いまでは研究会を牽引するメンバーとなってくださっている岩田泰氏（当時、経済産業省博覧会推進室長）、江原規由氏（当時、上海万博日本政府館長）に出会ったのだった。

二〇一〇年に上海で万国博覧会が開かれたことが、私たちの研究の直接の導火線となったことはいままでもない。タイミングも幸運であったが、私たちはこの万博に、一九世紀西洋の産

物を非西洋が追い求めてきたという文脈での、いわばキャッチアップの完成としての万博開催とは異なるものを見た。上海万博関係者はその準備段階で、アジアで初めて開催された一九七〇年大阪万博を先行事例として丁寧に参照したと聞かすが、二〇一〇年の会場で堂々と描き出されたのは、新たなグローバル・パワーとしての開催国中国の利益と欲望であり、またそれに対して参加諸国もそれぞれの仕方と呼応し、中国と自国の関係を展示に表現していた。上海万博は、一九世紀の西洋がつくり出した制度をアジアが消化し、追従も反動も超えて、二一世紀の世界における文明の新しいバランスの可能性を提示する場となったのではないか。上海の会場で得た強烈な印象は、初期のメンバーとの議論を通じ、今日あらためて、とりわけアジアを舞台に万博研究に取り組む意義についての確信につながった。

同時に本研究会は、万博の過去と現在を合わせて研究の俎上に載せるという明確な方針を持つことになった。そもそも第二次大戦後、または一九七〇年大阪万博以降、万国博覧会の時代は終わったともいわれてきた。たしかに、万博以外にも巨大な国際イベントの開催がめずらしいものではなく、国境を越えた人の移動も日常的になった時代のそれは、一八五一年にロンドンで始まってから主に二〇世紀初頭にかけて、欧米列強とそれを追いかける国々が産業の進歩を競い、世界を支配する力を誇示し合った万国博覧会とは性格を異にする。ゆえに従来、万国博の研究は、冒頭に紹介した京大人文研の研究すらが第二次世界大戦前まででその時期的範囲を区切っているように、役割を終えたという一九世紀型の万博を主に歴史家が扱うケースと、現代の万博をイベント分析の一環としてとりあげるケースとに分断されていたといつてよい。上海万博からスタートした私たちは、それらを同一線上の展開として理解することに意義を見出し、一九世紀半ばから今日までの万博史をつねに往還しながら議論してきた。

こうした方向性が徐々に明らかになってきた段階で開催したのが③のシンポジウムである。準備段階では単発の企画だったが、今日の共同研究会メンバーの多くはこのときに参加して下さっていた。これをぜひ継続的にやっていこうという皆さんの声に支えられて、④⑤と展開して行くことができた。その間にも、お一人お一人のお名前は挙げきれないが、素晴らしい仲間がさらに何人も加わってくれた。

メンバーの専門分野は、外交史、法制史、美術史、工芸史、建築史、思想史、文化人類学、地理学等々、文字どおり多岐にわたる。これは、万国博覧会という研究対象が自ずと招来する多様性というべきだろう。本研究会にはさらに、右の岩田、江原両氏をはじめとして、日常は研究を本業とするのではない、万国博覧会の企画・実施といった現場の仕事に携わる方々にも参加していただいている。現場のプロと研究者とをカテゴリー分けせず、同じ土俵で議論し、手を組んで同じ目標に向かうような環境をつくっていききたいという考え——夢——は、万博研究に限らず筆者がより深いところに抱いているものだが、万博という実践的素材をテーマとする研究会であってみれば、そうした顔合わせで構成するのは当然と思われた。とりわけ③のシンポジウムを通じて、そのような同じ土俵での議論が可能であることがはっきりとわかった。

本書は直接には⑤の研究成果と位置づけられるが、こうした①からの全過程を経て生まれたものである（各研究会の記録は巻末に掲載）。

ところで、本研究会ないし本書の目的は、「万国博覧会研究」なるものを領域として確立しようとするのではない。むしろその逆である。

およそ人文社会科学系の研究、なかでも近代以降の歴史に関心を持つ人であれば、自身の読書のなかで万国博覧会というもの必ずどこかに登場したはずであるといってもよいのではない。実際、万国博は、他に類似の大イベントが存在しなかった一九世紀はもちろん、第二次大戦後もなお、人間生活を一步前へと推し進めるさまざまな新しいアイデアが公表される場であり続けた。また世界最大の公式イベントとして、それが開催されたという事実や、その場を訪れたという経験は、とくに開催国の人びとの間に共通の記憶をつくり出し、ひいては社会のなかに、濃厚に色づけされた世代というものを生み出してきた——日本において一九七〇年大阪万博がそうであったように。万国博が世界の歴史記述の各所に顔を出すのは、実は当然なのである。

しかし、万国博の何たるかを知らなければ、世の重大事とは関係のない遊興的な催しとして、あえて関心を持つこともなく通り過ぎてしまうのではないだろうか。そしてまた、一般的な歴史書で触れられる万国博覧会は、大概その程度に扱われている。逆に、いったん万国博なるものに着眼すると、これが歴史上、人間生活にどれほど広範な影響を及ぼしてきたか、社会の動きが世界各国におけるたびたびの万博開催といかに密接に連動しているかを知り、もはや無視することはできなくなる。

この点において、右の④の共同研究会を開始する直前、一八六二年ロンドン万博の一五〇周年を記念してヴィクトリア・アンド・アルバート博物館で開催されたシンポジウム *Internationality on Display: Revisiting the 1862 International Exhibition* に参加し、イギリスを中心とする欧米の研究者らと交流する機会を得たことは、筆者が本研究会を続けてくるうえでとくに示唆的な経験であった。ここでは、万博を研究することの、万博それ自体の解析にとどまらない大きな意義が十分に認知されていた。そのことを説明抜きで共有できる環境に触れ、背中を押される思いがしたのである。

これは、歴史上早くから万国博覧会を開催してきた人びとならではの捉え方ではあろう。“Internationality”を標榜しながら、筆者以外には非西洋諸国の参加事例を提供する発表者が招かれていないというシンポジウムの構成に、彼我の視点のギャップを味わいもした。まずはアジア諸国を中心に比較・連携研究を進め、こうした場での非西洋諸国からの発信力をもっと鍛えなければとの思いを強くしたものである。また、むろん欧米の万博研究においても、たとえば日本などの「異文化」を専攻する研究者には、先述の日本での研究傾向とよく似た特徴も見出される。しかし全体としてはそうした異文化展示の問題よりも、このシンポジウムによく表れていたように、万博を人間社会全体を変化させてきたエンジンと位置づけて考察する視点が勝っており、万博という素材は、より広範な人びとが関心を持ち、研究対象としてとりあげうるものと考えられている。

本研究会はけっして「欧米風」を志したものではないが、万博を捉える視野の広さは右の状況と重なるところがある。メンバーはいずれも、「万博研究家」を標榜し、それに打ち込む者ではない。それぞれの文脈で万博と出会い、人間やその社会、世界への理解を深めるうえで、万博という糸口の重要性に注目するにいたった人たちであると述べて、大切な仲間の不興を買うことはないだろう。だからこそ、万博という相当に具体的なテーマを核に持ちながら、研究会での議論はいつも限らない広がりを持つものでありえた。私たちが本書を通じて伝えたいのは、そのような万博の見方である。逆にいえば、近代以降の人間社会に関する限り、いかなる

領域の研究に従事しようとも、万博というものは着目するに足る、または、けっして目をそらして通り過ぎることのできない対象であることを、ぜひ、知っていただきたいと思う。本書のタイトル「万国博覧会と人間の歴史」は、それを表したものである。

以下の本論に並ぶのは、こうした議論を通じてお互いに刺激し合った数年間の過程から、メンバーがそれぞれ導き出し、深めてきた視角である。研究会が内包するようになった広範な可能性に鑑みて、会の名称に付していた「アジア」の語は書名から外したが、当初からの問題意識を反映し、全論文の約三分の一が近隣アジア諸国の事例を扱っている。部立ては、万博事典などに見られる年代順や国・地域別の配列を避け、人間生活に身近なところで万博が果たしてきた役割をわかりやすく表現することを考えて構成した。ただし各部のなかは、扱っている内容に応じてほぼ年代順になっている。

第Ⅰ部「博覧会の人」に収載したのは、特定の個人（またはその集団）に着目して万博との影響関係を考察した論文である。これは、研究会での発表と意見交換の積み重ねのなかから、徐々に共通の着眼点として浮かび上がってきたものであり、本書が提示する特徴的な視角であると考えている。ここからは、万博が国と国との関係で動く抽象的な事象ではなく、ある時代を生きた人間たちの物語そのものであり、個々人の生身の人生と深く関わっていることが伝わるであろう。

冒頭の拙論でとりあげたのは、初代駐日英国公使ラザフォード・オールコックである。前記のとおり日本を一八六二年ロンドン博に導いたことで知られるが、ここでは彼が、一八五一年の第一回ロンドン博をはじめ他にいくつもの万博にかかわった経緯をたどり、ヨーロッパとアジアをつないだその人生と、万国博覧会というものの展開とを併せ考察した。芳賀徹氏は、その後、明治維新を経た日本にとって、実質的に近代化の緒をなした岩倉使節団が米欧回覧から体得した文明理解を、一八七三年のウィーン博視察という場面に絞り込み、団員らのいきいきとした観察眼を追って論じられた。それに続く時期を扱った寺本敬子氏の論考は、日本の輸出産業の発展、ひいてはヨーロッパにおけるジャポニスムの隆盛へとつながる国際文化史上の展開に重要な画期をなした、一八七八年パリ博への参加にあたり、現場で欠くことのできない働きを見せた前田正名という一人の官僚の存在にスポットライトを当てる。一方、ユク・ヨンス氏の論考は、朝鮮王国の一八九三年シカゴ博参加を担った鄭敬源という官僚に着目し、この仕事を通じて西洋文明に接した彼の動向を追跡したものである。ユク氏が「朝鮮の福沢諭吉」というこの人物について、広範な韓国語の史料によってその事績が紹介されたことは貴重であり、日本の読者にとってはまさに比較研究の醍醐味を与えてくれることであろう。

以上の論文が公的な立場に立つ人びとを扱ったのに対して、武藤夕佳里、青木信夫、林洋子の三氏が手がけられたのはそれぞれ、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、万国博覧会への参加経験を積み重ねながら自身の作風を確立し、人生の方向をも定めていった七宝作家・並河靖之、留学生として一九二五年パリ博を見たのち、帰国後の中国で一九二九年に開催された西湖博覧会において中心的な役割を果たし、中国建築史に一時代を築くことになった建築家・劉既漂、そして日仏をつないだ画家・藤田嗣治——この高名な人物の万博とのかかわりはこれまでほとんど顧みられることがなかった——と、三様の芸術家たちである。その万博との関係のあり方は、公的立場の人びとに比べてさらにさまざまで、だからこそ、こうして万博との出会

いとみずからの歩みが深く絡み合った人びとの事例は、これ以外にも存在するはずの多くの人生——むろん芸術家だけでなく、いろいろな職業の人を含めて——へと視野を広げてくれる。

続く第Ⅱ部「博覧会の場所」もまた、研究会で議論を重ねるなかから結ばれた焦点である。ウィーベ・カウテルト氏は、朝鮮王宮の地が一九一〇年以降の日本統治下で博覧会場に用いられ、その伝統的な風水の価値が失われると同時に、そこに新たな政治的意味合いが付与されていく様を空間デザインの立場から論じられた。増山一成氏がとりあげたのは、一九四〇年に予定され、現実には開催されることのなかった日本万国博覧会——その会場となるはずであった東京の隅田川近傍——である。読者はここから、「実現しなかった万博」もまた「人間の歴史」を明確に動かしてきたことを知るようになる。組み合わせを変え、藤田嗣治を扱った第一部の林論文と併せ読まれるなら、実現しなかったゆえに現実の歴史の画期としては注目されてこなかった一九四〇年博が、その準備が継続していた間に日本の文化史に与えた大きな影響を、あらためて検討しなければならないことに気づかされるであろう。

中牧弘允氏は、日本でついに実現した一九七〇年大阪万博の会場が持っていた特異な構造を、同博の隣接地に同時代に建設され、切っても切れない関係にある千里ニュータウンの構造と重ね合わせて分析された。他方、神田孝治氏が着目したのは紀伊半島、熊野の地である。二〇世紀全般にわたる長いスパンで、今日では古道で有名な熊野が観光地としてどのように認識されてきたのか、その変遷を追跡し、そこに同地での博覧会開催が絡む様子が具体的に明らかにされる。

第Ⅲ部には、社会の諸側面の発展・変貌を、博覧会との密接なかかわりから考察した論文を収めた。「博覧会と仕事・社会」と名づけたのは、とくに、博覧会の実施にかかわる職業をとりあげたものが多いという実態を反映したものである。第一部のように特定の個人を扱ったものではないが、やはり「人間」に着目することを重視してきた当研究会の特徴がここに現れているとともに、先にも触れたように博覧会の制作現場を熟知するメンバー諸氏が、みずからの知見を惜しみなく披露してくださった論考も含まれ、それらを収載することができたのは本書の誇りとするところである。

石川敦子氏は、明治以降の日本で急速に発達した展示専門業者——「ランカイ屋」——について、業界の雄である乃村工藝社で豊富な資料の整理にあたってこられた長年の経験を生かし、余人が試みたことのない整理と考察を手がけられた。日本の博覧会史の特徴ある一側面を初めて詳細に照らし出したものである。井上章一氏がとりあげた「コンパニオン」もまた、博覧会とともに発生し、推移してきた職業にほかならない。世上、大阪万博のコンパニオンはよく知られるが、一世紀をさかのぼってそのルーツが語られる。同時代のメディアに登場した多様な言説に基づく論考は、女性の社会的地位をめぐる問題とも裾野を接している。続く瀧井一博氏の論文は、一転して初代帝国大学総長渡辺洪基の発想と事績を紹介し、博覧会ブームとなった明治の世相と重ね合わせる。

鶴飼敦子氏は、もとより日本の万国博覧会研究と深いかかわりのあるジャポニズムを専門とする立場から、一九世紀の万博に日本から出品された金唐紙きんからかみという具体的な品物に着目することで、従来のジャポニズム研究の持ってきた視角に疑問を投げかけている。ジャポニズムという現象を文化のグローバルな影響関係のなかに相対化しようとする試みの一歩がここに踏み出されたと見たい。橋爪紳也氏は都市の電化という問題を通史的にとりあげ、博覧会史として論

じられた。技術的な面も、人の心にかかわる面も含めて、博覧会によって社会の変化が推し進められてきた、その最も典型的な一側面が鮮やかに映し出されている。

澤田裕二氏は、ご自身が催事の取りまとめにあられた二〇〇五年愛知万博を主な素材としながら、プロデューサーの目から見た博覧会の企画・制作の仕事について丁寧に整理して下さった。一方、岩田泰氏は、同じく博覧会づくりの仕事を、みずからが政府内で統括にあたった二〇一〇年上海万博、二〇一二年麗水万博への日本の参加実務の経過をたどることで、行政の立場から、しかし一執筆者として率直に解き明かされた。異なる視点から書かれた両論文は、行政と、いわゆる「業界」との連携が鍵を握る、独特ともいわれる日本の博覧会づくりの現場の構造を十全に語っている。

最後に、第Ⅳ部「博覧会の形成と展開」を置いた。ここに収めたのは、万国博覧会という事業それ自体や、万博をめぐる価値観の推移にかかわる論文である。市川文彦氏は、フランス語の *exposition universelle* という万博の呼称にあらためて注目し、一九世紀にたびたび開催され、初期の万博史を主導したパリ博の性格を、万国博ならぬ「万物」博として分析された。ジラルデッリ青木美由紀氏は、これまで日本では知られていなかったオスマン帝国の万国博覧会とのかかわりを、大量の史料調査と現地での研究生生活の成果から論じられた。先述のとおり本研究会では当面、主にアジア、とくに東アジア域内の比較を重視してきたが、そこから見えてきた問題の多くが、アジア以外の非西洋とも共通するであろうこと、むしろ異なる点も含めて、アジアの外へ広がる世界大の比較がいよいよ有用であろうことが、明確な問題意識として共有されつつある。青木氏の研究はその大きな展開への橋がかりとなるものである。

徐蘇斌氏は、万博への参加を通じた近代中国の歩みを、中国国内での博物館の形成プロセスまでを含め、先行研究と独自の史料分析を踏まえてまとめられた。現時点では論文の形ながら、この分野の研究における基本文献として参照されることになるであろう。日本のケースとの比較はもちろん、右のジラルデッリ青木論文との比較も興味深い。対して武藤秀太郎氏は、中国が国内で博覧会を開催するようになっていった側面に目を向け、初の本格的な博覧会と位置づけられる一九一〇年南洋勸業会に主な焦点を当てて、その経緯を日中関係の推移を背景に分析された。

川口幸也氏は、万国博覧会としてはアジアで初めて実現した一九七〇年大阪博において、とくに世界各地の美術の取り扱いに表れた政治性を論じられた。万博の持つ、産業・技術の祭典としての性格、また一方で、歴史的なオリエンタリズムの観点に隠れ、かえって見落とされてきた、今日の多くの現代美術展につながる展示倫理の問題がここに指摘されている。江原規由氏は、ご自身が二〇一〇年上海万博において日本政府館長を務められた立場を振り返り、万博実現までの道のりを支えた中国の歴史上の人物らに思いを馳せつつ、貴重な経験を開示された。そして、最終章となる曹建南氏の論考は、唐代から二一世紀の中国にいたる時間の流れを視野に入れ、中国における「博覧会」なるものの形成と展開を追跡された壮大なまとめである。

さて、右の曹論文では、現代における「博覧会」という語の多様な使われ方、他方で類似の事業を指す他のさまざまな用語の存在も、一つの論点となっている。日本の場合に目を向けると、もともと西洋語を訳した万国博覧会、同種の事業を国内規模で実施するようになった際の

内国勸業博覧会に始まり、今日、各地の自治体主導で開かれる地方博覧会やデパートその他の催事としての博覧会にいたるまで、「博覧会」の語が乱れ飛ぶありさまは、研究会でも当初からメンバーの関心が集中した問題の一つであったが、こうした日本での事情に関しては本書で独立した論考とすることができなかつた。中国での展開をとりあげてくださった曹氏に感謝したい。同じ漢字文化圏において、これも比較の興味の尽きない論点である。

「博覧会」の語はいかにも乱用されている観があるが、この状況を批判したり、「本当の」博覧会はどこまであるかを定義しようとしたりすることには、あまり意味がないと考えている。今日、一般の催事で「博覧会」というネーミングが乱用を招くほどに好まれているならば、一九世紀、日本で「万国博覧会」の語が定着し、この現状にいたるまでが、まさに追うべき歴史の一側面というべきだろう。もっとも、実際に開催される万国博覧会に関しては、その発祥から八〇年近く経過した一九二八年に国際博覧会条約が採択されて一定の制度化を見、以降、改正を経ながらも、同条約のもと、その事務局である博覧会国際事務局（BIE）に登録・認定されたものが公式のそれであるという明確なルールがある。その範囲の万博（正式には「国際博覧会」）に限定して研究対象とする選択肢もありうるかもしれないが、本研究会ではそうした考え方はとらなかつた。

したがって、本書においては、「博覧会」という語の用い方はその現実の状況に応じて多様なままになっていること、各執筆者がとりあげた対象も狭義の万国（国際）博覧会から、その受容によって国内的に展開した博覧会まで、さらに曹論文のようにその周辺に広がる各種の博覧会をも含むものであることを、ここでお断りしておきたい。しかし書名には、その考察の中心に位置するものを表現するために「万国」博覧会を用いた。

各論考が提示する「万国博覧会と人間の歴史」の諸相を、味読いただければ幸いである。